



発話行為理論から見た文末の接続表現の用法 : カ ラ・ケド・シを中心に

著者	孫 思?
雑誌名	筑波大学地域研究
号	38
ページ	95-112
発行年	2017-03-31
その他のタイトル	A Speech Act Theory Approach to Japanese Conjunctive Particle Used in the End of Sentences: Focusing on Kara, Kedo and Shi
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145759

発話行為理論から見た文末の接続表現の用法 —カラ・ケド・シを中心に—

A Speech Act Theory Approach to Japanese Conjunctive Particle Used in the End of Sentences:
Focusing on Kara, Kedo and Shi

孫 思琦
SUN Siqu

筑波大学地域研究 第38号 別刷

平成29年 3 月

筑波大学人文社会科学研究科
国際地域研究専攻

発話行為理論から見た文末の接続表現の用法 —カラ・ケド・シを中心に—

A Speech Act Theory Approach to Japanese Conjunctive Particle Used in the End of Sentences: Focusing on Kara, Kedo and Shi

孫 思琦
SUN Siqi

Abstract

Unfinished sentences which end with conjunctive particle such as *kara*, *kedo* and *shi* are often used in the spoken Japanese. This paper aims to clarify and systematize the usage of *kara*, *kedo*, *shi* as an end-of-sentence expression from the viewpoint of speech act theory. Firstly, the omitted main clauses will be recovered depending on their context, then summarized the illocutionary acts of main clause and subordinate clause. It is found that usage patterns of *kara*, *kedo*, *shi* as an end-of-sentence expression are different from those of a connective expression. *Kara* is generally believed to be a connective expression which indicates reason or cause. When used at the end of a sentence as the pattern of 'assertive + Ø', it may not express a reason but the speaker's strong intention. *Kedo* used in unfinished sentences serves not only the same function as a connective expression, but also as request for improvement to hearer's actions or thoughts. In addition, *shi* can indicate cause from a speaker's viewpoint in order to convince a hearer, functionally similar when used as conjunctive particle. Also, it can express the speaker's negative emotion as a characteristic usage.

Key Words : Connective Expressions, End-of-Sentence Expressions, Speech Act, Illocutionary Acts, Intention of Utterance

キーワード：接続表現、文末表現、言語行為、発話内行為、発話意図

1. 問題提起と研究目的

日本語の日常会話では接続助詞で言い終わる表現が頻繁に使われている。

- (1) 何の問題もないと思うケド。
- (2) それでも10枚ほど持ってますカラ。
- (3) 何も状況は変わらないシ。

(日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) 用例)

一見すると、このような表現は主節が省略されただけに見えるが、意味的には通常の文と同じ完結性を持っており、日本語学習者にとって習得が難しいとされている。誤用例として次の(4)が挙げられる。NSは日本語母語話者で、NNSは日本語学習者である。

(4) NS : Rさんは日本語がとても上手ですね。

NNS : いやいや、とんでもないですケド。

NS : 自信はありますか？

NNS : え？日本語を話す自信ですか？

NS : ええ。

NNS : すー。そうですね。えー、自信、自信はそんなにないんですケレド。

(成田 2004 : 84)

学習者は文末に現れたケドは丁寧さを表すための表現と考えたが、その使用は謙虚さを表す意図に矛盾し、丁寧さを表しているとは言えない。このように実際の使用場面においても、接続助詞を文末に付ければ必ず口調が丁寧になるわけではなく、場合によって非難の意が含意され、相手の感情を害する用例も見られる。

(5) (会社で工作中同僚に用意を頼まれるが、忙しいので断る)

「今ちょっと手を離せないんですケド。」

(楠木 2015 : 47)

そこで、本研究は文末の接続助詞を、主節を省いた省略表現ではなく、積極的に何らかの意図や感情を伝えるための文末表現とみなすという立場をとる。接続助詞の文末用法に関する研究は盛んになっているが(曹2000; 朴2008; 前田2009; 許2004; 2010など)、これまでの研究の多くは個別の用法の記述にとどまり、体系的な研究と言えるのは白川(2009)のみである。白川は文法論の観点から網羅的な考察を行って、接続助詞を文末につける場合(「言いさし文」と従属節末につける場合(「完全文」))に異質性と平行性が同時に存在していると主張したが、異質性について明確な説明はなされていない。平行性だけに注目してしまうと、学習者は接続用法からの類推で文末用法を理解して、文末表現ならではの用法を理解できないことが予想される。

(6) A : カラオケ行く？

B : めっちゃ行くシ！

(作例)

Aが求めている情報は、日頃にBがカラオケに行くかどうかということである。「行く」または「行かない」だけでも十分な答えであるが、Bが発話の最後にシをつける理由は、情報を提供する以外に、「当たり前なことを聞かないで」という非難の気持ちも伝えたいと考えられる。(6)

のシは情報を提供して主張を伝える点で、接続表現としてのシと連続しているが、話し手が伝えた否定的な態度は簡単に接続用法から推測して理解できるとはいえない。文末の接続助詞に関する先行研究が多くなされているにもかかわらず、接続用法と統一に記述した枠組みがまだ確立されていない現状を受け、本研究はカラ・ケド・シの接続用法と文末用法を比較しながら取り上げ、発話行為の観点から記述の体系化を試みる。

II. 理論的枠組み—発話行為理論—

本節では、カラ・ケド・シの文末用法を分析するための必要な理論的枠組みを概観する。

先行研究の多くは文法論の観点から接続助詞の文末用法を捉えており、命題レベルでの考察が殆どである。しかし、文末用法で伝えられる話し手の意図や感情などは、発話機能レベルのものであり、従来の分析観点には限界がある。よって、本研究は新たに語用論的な視点を取り入れ、接続助詞の接続用法及び文末用法を再検討する。

言語使用は様々な語用論的原則に影響されるが、その中でも本研究が注目している話し手の意図に関わる重要な概念として、Austin (1975) と Searl (1976 ; 1979) が提唱する「発話内行為」がある。発話内行為とは「何かを言いつつ遂行する行為」であり、Austin (1975) で「判定宣告型」、「言明解説型」、「権限行使型」、「態度表明型」、「行為拘束型」の5つに分けられたが、Searl (1976) に指摘されているように、この分類は発話内行為の分類よりも英語の動詞の分類と考えたほうが妥当である。SearlはAustin分類を見直し、行為の目的、話し手の心理的立場などを基準に、発話内行為を「断定型」、「行為指示型」、「行為拘束型」、「表出型」、「宣言型」に再分類をしたが、「宣言型」は「非常に特殊な範疇である」(Searl 1976)、「伝達の行為というより慣例的である」(Leech 1983) という理由で、本研究は考察範囲から除外している。また、Leech (1983) で「尋ねる」、「質問する」などの動詞は「質問型」の発話内行為と対応するという意見を取り入れ、本研究で捉える発話内行為を次の表1にまとめる。

表1. Searl (1976)、Leech (1983) による発話内行為の分類

種 別	目 的	心的立場 対応する心理的述語	例
断定型	程度の差があれ、話し手を事態の事実性の問題に係わらせ、表現された命題の真理性に結びつける	信念 ex.信じる/仮定する	確認、主張、予言、記述
行為指示型	話し手が聞き手にある行動を行わせようとする	意志 ex.願う/するつもりである	願望、指図、命令、依頼、指示、提案、助言、約束、義務、威嚇、保証
行為拘束型	話し手を将来の行動に拘束し義務づける		
質問型	話し手は聞き手にあることに対する疑いを表し質問する	疑念 ex.不思議に思う/疑う	質問
表出型	命題内容の事態に対する誠実条件からみた心的立場の表明	態度 ex.許す/感謝している	感謝、祝賀、弁解、悔やみ

分析の手順として、まずはカラ・ケド・シの前後に出現した発話内行為を考察する。その上で、接続用法と発話内行為のパターンを比較して文末用法の特徴を見る。文末用法の場合は主節に相当する内容が明示されないが、文脈に合わせて複文に復元してから分析を行う。

(7) 時枝：「自炊はどう？外食より、お金かってんじゃない？」

栄介：「章ちゃんが、上手くやってくれてるよ。」

時枝：「…そう。あの、意外とケチそうだからね。」

(市川森一『黄色い涙』白川2009：111より再掲)

(7) のカラは理由を提示することによって相手に納得させるものであり、主節の内容は栄介の発話で前の文脈で先に出てきた。(7) のカラによる発話を (7') の複文に置き換えても、発話の意味とそれが担う話し手の意図や態度に大きな変化がないため、(7') に復元すれば、カラの後に来るべき発話内行為も考察できる。

(7') あの、意外とケチそうだから、上手くやってくれてるんだ。

「あの、意外とケチそうだから」と「上手くやってくれてるんだ」という発話は、いずれも事態の事実性の問題に関わる内容であり、発話内行為はともに「断定型」とであると判定できる。また、「上手くやってくれてるんだ」というのはカラの直後で出現した発話ではないが、複文の主節と区別するために、括弧をつけることにする。そこで、(7) のカラは本研究で、「断定型＋(断定型)」のカラと表記する。

接続助詞の文末用法は話し言葉で多く出現し、本研究は日常会話の場面を最大限に近いデータとして、分析のデータはテレビドラマ11話から抽出した用例を使用する¹。考察対象は、従属節の内部要素の制限が少ない（南1974）、かつ文末の使用頻度が高い（朴2008）カラ・ケド・シを中心に行う。

III. 考察

1. カラ

(1) カラの接続用法

従属節と主節に現れた発話内行為を整理した結果、「断定型＋断定型」、「断定型＋行為指示型」と2つのパターンが得られた。

1 接続助詞の文末用法を分析する際に日常会話のデータが理想的であるが、録音された自然会話は主に雑談会話であり、喧嘩など多様な生活場面を反映できない欠点がある。ドラマシナリオは日常会話と性質が違うが、多様な場面において言語使用を捉えられるため、幅広く使われている文末の接続助詞の研究資料として妥当だと考える。

① 断定型+断定型

「断定型+断定型」はカラの接続用法で最も多く見られるパターンであり、従属節と主節の内容によって、さらに「事態の原因」(8)、「判断の根拠」(9)、「行為の理由」(10)に分けられる。

(8) 礼：「おかしいですか？」

多田：「いえ、独創的で面白いと思います。ただ、厳密に言うと、これを実際に建てるとなると非常に難しいかなーとは思っています。」

礼：「ほんとに、そうでしょうか。」

多田：「え？」

礼：「そうやって、現場にいない私たちが決め付けるから。」

多田：「決め付けるカラ、職人が育たなくて、昔の技術がどんどん廃れていく。」

(『プロポーズ大作戦』第5話)

(9) 妖精：「お前は何度同じ失敗をすれば気が済むんだ！何でタイミングやきっかけに頼ろうとするんだよ！この信号が変わったら告白しよう。この車が通り過ぎたら言おう。二人きりになったら気持ちを伝えよう。そんな小さなことにこだわっているカラ、大きな幸せがつかめないんだよ！」

健：「…なんか…すみませんでした。もう…終わりにします。」

妖精：「うん！？」

(『プロポーズ大作戦』第7話)

(10) 健：「人生で初めて買った指輪。給料3か月分とはいかなかったけど、どうしても買いたくなって、初任給全額で、勝負をかけた婚約指輪。サイズを聞かれて、礼の指にはまらないと嫌だったカラ、一番大きいサイズで、と頼んだ。俺の指でも、ブカブカだ。」

(『プロポーズ大作戦』第9話)

「断定型+断定型」のカラは、「原因・根拠・理由を表す」(国立国語研究所1951；前田2009など)働きをしているカラである。主節部は事態を叙述するか(8)、話し手本人の判断を示すか(9)、話し手の行為を表すか(10)によって分けられるが、いずれも話し手の信念に関わる事柄であり、根底に同じような性質を持っていると考えられる。

② 断定型+行為指示型

(11) 礼：「とにかくじいちゃんは帰って！ばあちゃんが心配するでしょ！」

大志：「お前そういうトコほんとにばあさんそっくりだな。ロクな男と結婚出来ない

ぞ。」

礼：「それでもいいカラ早く帰って！」

大志：「…礼！わしと一緒にプリクラ撮ろう！」

礼：「プリクラ！？」

（『プロポーズ大作戦』第5話）

「ロクな男と結婚出来ない」ことは「どうでもいい」と考える「礼」は、お爺さんの大志に「早く帰れ」と指示を出す。このタイプのカラは「原因・理由・根拠を表す」働きをするのではなく、聞き手に行動を促す前提条件を提示しており、先行研究で「原因・理由・根拠を表さない」（白川2009、前田2009）用法、「働きかけの条件を表す」（許2010）用法に当たると考える。

（2）カラの文末用法

カラの文末用法は接続用法と同様に、「断定型+（断定型）」、「断定型+（行為指示型）」があるが、「断定型+Ø」という文末でしか見られないパターンも確認された。

① 断定型+（断定型）

文末用法の「断定型+（断定型）」は、接続用法の「断定型+断定型」とほぼ同様である。ほとんどの用例は、文脈から主節部に相当する情報があるが、接続用法と同じように「事態の原因」（12）、「判断の根拠」（13）、「行動の理由」（14）と3種ある。

（12）エリ：「うーん、2週間でわかったのってこれくらい？」

幹雄：「それって全部最初の挨拶の時に言ってたじゃん。」

エリ：「だってそれしか情報ないんだもん。」

礼：「あの人黙々と授業やってるだけだカラねー。」

（『プロポーズ大作戦』第3話）

（13）エリ：「いいじゃん別に。人に迷惑かけてないんだカラ。」

礼：「そうかなー！？」

（『プロポーズ大作戦』第5話）

（14）健：「思わず泣きそうになった。礼のウェディングドレス姿が、あまりにも綺麗だったカラ。」

（『プロポーズ大作戦』第1話）

② 断定型+（行為指示型）

文末用法の「断定型+（行為指示型）」も接続用法と連続しているパターンであるが、「断定型+（断定型）」とは異なり、主節に相当する内容は文脈でほとんど見つからない。

(15) 父：「あ…礼、多田さん。ご結婚、おめでとう。しかしまあ正直なところ私は、今でも…こんなに早く、結婚する必要はないと、思ってる。」

母：「もう！お父さん！」

父：「いいカラ。あー、私が結婚するときも…妻の父親に、猛烈に、反対をされた。ずいぶん…理不尽な人だったと、思ってる。しかし、礼が生まれたとき、初めてその、お父さんの気持ちが、わかった。」

(『プロポーズ大作戦』第10話)

(16) 多田：「あ、あの、さっきの交わらない曲線の話なんですけど、説明がちょっと、わかり辛かったかなと思ひまして、対象性を使えば、もっとシンプルに説明出来るということに気付いたんです。」そう言い、数式の説明を始める。

礼：「黒板、健ゾウの番だカラね！」礼が健に言う。

健：「ああ…」

(『プロポーズ大作戦』第3話)

主節相当部が明示化されていない理由は、会話双方に暗黙の了解が前提として存在することである。(15)の「いいカラ」は、すでに不満表明の慣用表現になっており、行為指示を言語化しなくても明確に自分の意図を相手に伝えられる。(16)で、「黒板、健ゾウの番だからね！」は「いいから」のような慣用的な表現ではないが、「健」も「礼」も日直の仕事を二人で分担するという前提を知っているので、「黒板を綺麗にしてください」という指示を明示的に言う必要はない。

③ 断定型+Ø

「断定型+Ø」は、カラの文末用法で最も特殊なパターンである。「断定型+(断定型)」のように主節が文脈に現れることもなく、「断定型+(行為指示型)」のように行為指示を簡単に復元することでもない。文脈を参考にして複文に還元しようとすれば、いずれも若干不自然に感じられ、相手の話に対する反論を表したり、話し手の強い主張を行ったりする用例がほとんどである。

(17) 幹雄：「ちょっと、力入れすぎじゃない？」

エリ：「まだ誰かさんと仲直り出来てないからだよ。」

礼：「そんなの全然関係ないカラ！」

(『プロポーズ大作戦』第3話)

以上、発話行為の観点からカラの接続用法と文末用法を整理した。カラの接続用法と文末用法は多くの場合で連続しているが、「断定型+Ø」という文末用法の独特なパターンもあることが確認できた。「断定型+(断定型)」のカラは「原因・根拠・理由」に後続し、話し手の信念に関わる事象と呼応しているが、「断定型+(行為指示型)」のカラは「働きかけの条件」を提示し、

相手に何かの行動を行わせようとしている。そして、「断定型+Ø」のカラは、主節にあたる内容が復元しにくいという特徴を持ち、ほとんどの用例は話し手の強い反発や主張を伝える際に用いられる。

カラの文末用法「断定型+(断定型)」、「断定型+(行為指示型)」は、接続用法の「断定型+断定型」、「断定型+行為指示型」と連続性が強い。一方、文末用法の「断定型+Ø」は、接続用法との連続性が弱く、話し手が持つ強い不満や反論を伴って使われることがわかった。

2. ケド

(1) ケドの接続用法

発話行為の観点から、ケドの接続用法は「断定型+断定型」、「断定型+質問型」、「断定型+行為指示型」の3つのパターンにまとめられる。

① 断定型+断定型

ケドの接続用法において、「断定型+断定型」は最も頻繁に現れるパターンである。国立国語研究所(1951)で記述した「逆接」(18)、「持ち出し」(19)、「ならべあげ」(20)のケドは、いずれも「断定型+断定型」のケドと考えられる。

- (18) 礼：「卵焼き！じいちゃんの卵焼き超美味しいんだよ！他の料理は、全然ダメだケド、卵焼きはばあちゃんのより美味しいの！」

健：「へー。」

(『プロポーズ大作戦』第5話)

- (19) 健の家へと走る礼。玄関の前で、深呼吸をし、インターホンを押す。

礼：「ケンゾー。礼だケド…薬買ってきたよ。」

返事がない。

(『プロポーズ大作戦』第6話)

- (20) 幹雄：「この写真の日が最後だったよな。」

健：「？」

幹雄：「過去へタイムスリップして来てたんだろ？」

健：「！！」

幹雄：「何となくは気付いてたケド、さっき確信したんだ。(後略)」

(『プロポーズ大作戦』第7話)

② 断定型+質問型

「断定型+質問型」のケドは先行研究の記述で見当たらなかった用法であり、「持ち出し」に

近似しているが、主節は会話相手に投げ出す質問であるから、「持ち出し」の用法と区別したほうが妥当である。

(21) 多田：「…あの、一緒に来てほしい場所があるんだケド、今平気？」

礼：「うん。大丈夫。」

(『プロポーズ大作戦』第9話)

③ 断定型＋行為指示型

「断定型＋行為指示型」のケドは、指示を出す前に聞き手に選択の余地を与える「よかったら」と併用したり(22)、口調を和らげる「思う」と共起したり(23)することで、相手を押し付けないように様々なストラテジーが使用されている。主節は同じ行為指示型であるが、押しつけ感の強い「断定型＋行為指示型」のカラと比べて、「断定型＋行為指示型」のケドはよりやわらかくて、主節の内容も要求より依頼に近いと言える。

(22) (エリがそう返事した時、携帯にメールが入る。)

「今度、バレーの大会があるんだケド、よかったら、応援にきてください。」

(『プロポーズ大作戦』第5話)

(23) 礼：「急にどうしたの？」

エリ：「礼が幸せになること、本当に願ってるの。…どうしようかすっごい迷ったんだケド、礼は、本当に大事な人だから、だから…ちゃんと納得のいく答えを出してほしいって思ったの。」

(『プロポーズ大作戦』第11話)

(2) ケドの文末用法

ケドの文末用法にも「断定型＋(断定型)」があるが、接続用法に見当たらなかった「断定型＋ \emptyset 」のパターンもある。

① 断定型＋(断定型)

「断定型＋(断定型)」のケドは接続用法から派生する用法である。前節内容は主節に当たるものもあり、従属節に当たるものもあるが、いずれも聞き手の認識に影響を与える用法である。

①-1「従ケド(主)型」：ケドが従属節に相当する内容に接続して、前文脈で出現した主節に相当する内容の補足情報として聞き手に示し、事態の全貌を理解させる。(24)

①-2「主ケド(従)型」：ケドが主節に相当する内容に接続して、前文脈の情報よりさらに重要な情報があると聞き手に提示し、事態を叙述する焦点を変える。(25)

(24) 多田：「高校の時さ、誰かに第2ボタンとか貰わなかったの？」多田が礼に聞く。

礼：「うん…貰ったといえば貰ったかな。」

多田：「ふーん、そうなんだ。」

礼：「変な第2ボタンだったケドね。」

多田：「変な？」

(『プロポーズ大作戦』第4話)

(25) (テーブルに第2ボタンを置く男…尚だ。)

尚：「いや、もう、全然取りに来ないからさ、届けに来ちゃった！」

エリ：「欲しいなんて一言も言ってませんケド。」

尚：「まーそう言わずさ、貰っとけ。」

エリ：「ほんととにいないから。こんなボタン1個貰ったってね、何の役にも立たない。」

(『プロポーズ大作戦』第4話)

(24)を複文に還元すると「届けに来ちゃったけど、欲しいなんて一言も言ってません。」にしたほうが話し手の意思に相応しいと考える。ケドの前接内容をそのまま従属節と見なすと、「欲しいなんて一言も言ってませんが、届けに来ちゃった。」となり、話し手が強調したかったこととずれてしまう。敢えて主張したい内容(つまり主節に当たる内容)を従属節のように発話する原因について、今尾(1994)の指摘が参考になる。今尾(1994)では「『ケレド』は前接する要素を非焦点化し、焦点要素が後続することを予告する機能をもつ」と述べ、話し手が主節を従属節のように用いるのは自分の主張を非焦点化するためであると考えられる。

② 断定型+Ø

「断定型+Ø」のケドは、文脈で主節に相当する内容が見つからない、かつ復元できない特徴があるが、話し手の態度及び意図によって2つに分けられる。

②-1：話し手には、会話がうまく続けられない見通しがあって、できれば一人で決め付けないように、相手と会話の進め方を共有している姿勢を示す。

②-2：聞き手に直接的な接触を回避できる場合で不満を表す。

②-1は、相手の意見を否定したい(26)、相手が自分の提案を受け入れられるかどうかかわからない(27)、相手に迷惑をかけるかもしれない(28)などという、これから会話の継続性に困難があることを伝えている。この用法は日本語学習者にとって非常に理解しにくくて、最初に挙げた誤用例(4)も、このようなケドを使う前提として「会話がうまく続けられない見通しがある」という認識の欠如から発生したと考えられる。

(26) 妖精：「お前さー、」

健：「出た！！」

妖精：「泣き顔を笑顔に変えたぐらいで、人生変えられると思ってる！？」

健：「いや…思っていないですケド…」

妖精：「もう少し劇的な展開に持ち込むとか、派手な演出試みるとか、他にやりようなかったのか！？あれが、お前のベストパフォーマンスか！？」

(『プロポーズ大作戦』第1話)

(27) 礼：「どうせ今日も誰にもボタン貰ってもらえないんでしょ？」

健：「え？」

礼：「中学の時の卒業式だってそうだったじゃん。誰も貰ってくれないから、私が慈悲の心で貰ってあげたんでしょ？」

健：「なんだそれ。」

礼：「今日も、可哀想だから、貰ってあげてもいいケドね！」

(『プロポーズ大作戦』第4話)

(28) エリ：「ねえ鶴！」尚を呼び止める。

鶴：「よ！何、何！？」

エリ：「付き合ってほしいところあるんだケド！」

鶴：「…きたーっ！！」

(『プロポーズ大作戦』第6話)

また、話し手の強い不満を伴う②-2の用例もあるが、「断定型+Ø」のカラと異なって、「断定型+Ø」のケドは聞き手と衝突を避けようとする傾向が見られる。例えば(29)の話し手は不満の相手がいない場面で文句を言う、また(30)のように、明示的ではなく文句をいう例もある。

(29) (部室 多田の<性格>に「意味不明」と書き込むエリ)

エリ：「ね！あの人全然わかんないんだケド！！」

礼：「あれ？わからないのが、いいんじゃないかったっけ？」

尚：「ま、俺らのことなんか、全く眼中にないってことだな。」

礼：「ミス立修の私がダメってこと！？」尚に掴みかかる。

(『プロポーズ大作戦』第3話)

(30) 礼：「先生と何か競ってるの？」礼が聞く。

健：「男は勝つか負けるかだろ。」

多田：「岩瀬君には、勝てそうもないですけど。」と多田。

健：(心の中で)「なんかむかつくんですケド！」

(『プロポーズ大作戦』第3話)

②-1と②-2は、構文上で主節が還元できない、機能的には話し手の妥協を表す点で共通しているが、衝突が生じる可能性がある相手が対面するかしないかによって、話し手の不満の強さには違いが見られる。

以上、発話行為の観点からケドの接続用法と文末用法を整理した。文末用法のケドの前に来る発話内行為型は「断定型」のみであり、主節に相当する内容は「断定型」と「 \emptyset 」と2種類ある。「断定型+（断定型）」のケドは前接内容の重要性によって補足情報を補う用法と自己主張に焦点を当てる用法に分かれているが、2つの用法はともに会話相手の認識に影響を与える働きをしている。一方、「断定型+ \emptyset 」のケドは聞き手と衝突を避けながら不満を表す場合によく使われているが、不満の対象に直接に不満を伝えられないため、話し手が自分の感情を抑えようとするものが伺える。

ケドの文末用法に、「断定型+（断定型）」のように接続用法と連続している用法もあり、「断定型+ \emptyset 」のように文末でしかない用法もある。また、接続用法に見られる「断定型+（行為指示型）」、「断定型+（質問型）」は文末用法のデータで見当たらなかったが、その理由はケドの接続用法の多様性が影響していると考えられる。順接関係でしか使われていないカラと対照的に、ケドの最も基本的な接続用法であっても、「逆接」、「順接」（「持ち出し」）、「並列」（「ならばあげ」）と3種類ある。主節が明示的に現れない場合は、いずれの論理関係も考えられるため、「行為指示型」、「質問型」のような共有度の低い情報は想定させることは誤解を招きやすい。もちろん、「断定型+（行為指示型）」、「断定型+（質問型）」のケドは存在しないと断言できないが、使用率は「断定型+（断定型）」、「断定型+ \emptyset 」より低いことは想定内である。

3. シ

(1) シの接続用法

シの接続用法は「断定型+断定型」のみである。話し手の主張まで至るかどうかによってさらに2つに分けられる。

断定型+断定型

まずは話し手の主張に帰結する用例である。使用可能の幾つかの材料から最も説得性のあるものを選んで主張の根拠とする用法である。

(31) (研究室 行き詰まりため息をつく礼に)

多田：「まだ、締め切りまで時間がありますシ、そんなに焦らなくても平気ですよ。吉田さんの作品の場合、各ボリュームのつながり方を表現することにポイントを絞っていけば、すぐく目を引くものになると思うんですよ。」

(『プロポーズ大作戦』第5回)

一方、話し手のあからさまな主張と直結しない、複数の事態を並列するだけの用例もある。

(32) 健：「たった一年ちょっとだろ？一年で…多田さんの何がわかるんだよ。」

礼：「そんなのわかんないよ。わかんないこと沢山あるよ。多田先生だって、私の知らないこと沢山あると思う。でも…大切なって、これから、その人と向き合っていきたいかってことだと思う。もっともっと、多田先生のこと知りたいと思うシ、私のことも、知ってほしいと思う。」

(『プロポーズ大作戦』第9話)

(33) エリ：「やっとな陶芸始めたんだ。」

伊藤：「いや、まだ始められる段階に達していない。ひげも生やしたシ、念願のろくろも手に入れたんだが…」

礼：「何が足りないんですか？」

伊藤：「嫁さんだよ。」

エリ：「嫁さん！？」

伊藤：「そこが揃わないと陶芸は無理だ。ひげ、嫁さん、ろくろだろ？」

(『プロポーズ大作戦』第9話)

(2) シの文末用法

シの文末用法には「断定型＋(断定型)」、「断定型＋ \emptyset 」、「断定型＋ \emptyset (独り言)」と3つのパターンがある。

① 断定型＋(断定型)

文末用法で最も頻繁に現れるパターンである。話し手は個人の判断(34)、事態に対する態度(35)、また行った行為(36)を相手に納得させるように信頼性の高い証拠を提示する。話し手の主張は前文脈で明言したこともあるが(例えば34、35の破線部)、文字化しない場合もある(36)。

(34) 幹雄：「過去へタイムスリップして来てたんだろ？」

健：「！！！」

幹雄：「何となくは気付いてたけど、さっき確信したんだ。お前がおかしなこと言ってた日と、このスライド写真の日がぴったり一致するんだ。だってお前さ、生の北島康介より先に、『気持ちいい！超気持ちいい！』って言ってるの、おかしいだろ？ビデオにもちゃんと残ってるシ。(後略)」

(『プロポーズ大作戦』第6話)

(35) (仕方なく教室に戻ると、礼は不機嫌に)

健：「アンニョンハセヨ！…ごめん。コーヒー牛乳買えなかった。」

礼：「買えなかったんじゃないでしょ。」

健：「しょうがねーじゃん。」

礼：「別にいいけど。元々、ケンゾウにはなんも期待してないシ。」

健：「…あら、そ。」教室を出て行こうとする。

(『プロポーズ大作戦』第2話)

(36) (健が「コーヒー牛乳」と書いてあった紙を礼に渡す。)

礼：「何これ。」

健：「引換券。いや…ほら…明日の俺がさ、覚えてねーかしんねーシ。」

礼：「いらないならいいよ。」礼が笑う。

健：「もらっというてあげるよ。」

(『プロポーズ大作戦』第2話)

また、文末のカラと同時に使う用例も多く見られる。カラは主張の根拠を先に提示し、シは「それに加えてさらに…」という意味で用いられて、主張の合理性を高める働きをしている。

(37) 妖精：「正真正銘、これが本当の、ラスト・ハレルヤチャンス！」

健：「…」

妖精：「でもまあ、お前の友達は親切なんだか不親切なんだかわからないな。よりによって、こんな日の写真を、用意するんだからな。」

健：「多田さんの晴れ舞台の時の写真ですカラね。ま、こんな写真ならあってもなくても変わらないかなー、みたいな。っていうかもう結婚式直前の写真ですシ。」

(『プロポーズ大作戦』第10話)

結婚式に参加している「健」は「妖精」の力で結婚式で披露した写真を通して過去の時点に戻り、色々と反省してやり直した結果、好きな人を取り戻した物語である。(37)は、最後のタイムスリップのチャンスを狙った「健」が、友達の用意した写真を見てがっかりしたときの会話である。「健」は「こんな写真あってもなくても変わらない」と思いつつ、自分がそう思った理由を前文脈で「(ライバルである)多田さんの晴れ舞台の時の写真ですカラ」と述べ、その後さらに「っていうかもう結婚式直前の写真ですシ」を加えた。ライバルの晴れ舞台より、結婚直前ということはより説得性のあるので、それを提示すれば、聞き手により納得してもらいやすくなる。

文末のシが持つ「より説得性がある根拠を加える」用法は、話し手自分の主張に限らず、他人の意見に賛成する際にも使用できる(38)。

(38) エリ：「ある意味羨ましいよね。一瞬にして、高校時代に戻れるなんてさ。」

礼：「伊藤先生なんて張り切りすぎだからね！」

エリ：「一番弾けてるシ。」二人が笑う。

(『プロポーズ大作戦』第8話)

「断定型＋(断定型)」にシが連続して使われる例もあるが、このような用法は接続用法の「断定型＋断定型」と同じように捉えられるため、ここで論を省略して例だけを示す。

(39) 保：「ツルもまだフリーターだろ？」

エリ：「ツルと一緒にだから焦ってんじゃない！俺はビッグな男になる、とか言ってるから、どんな努力してんのかと思ったら、牛乳を毎日2リットル飲んでんだよ！2リットル！3リットルだっけな？ま、いいや。あんなにちっちゃいのにな、声だけは大きいし、男らしさもなんか微妙に違う気がするシさ。」と言いつつ嬉しそうな顔をしている。

(『プロポーズ大作戦』第9話)

② 断定型＋Ø

「断定型＋(断定型)」と比べて、「断定型＋Ø」のシは話し手の態度(40)・判断(41)・行為(42)の根拠ではなく、態度・判断・行為自体を表しており、主節の内容は文脈になくかつ復元できないのが特徴である。このパターンのシは、話し手自身が思っている「言うまでもないこと」を述べて、「当たり前なことを言う必要はない」という暗に反発な態度を伝える例が多い。

(40) エリ：「礼の為に一生懸命買いにいつてくれてるんでしょ！コーヒー牛乳！」

礼：「違うと思うけど。」

エリ：「嬉しいくせに！」

礼：「全然嬉しくないシ。」

エリ：「そうかなー。」

礼：「そうだよ。」

(『プロポーズ大作戦』第2話)

(41) エリ：「応援してあげなくていいの？」

礼：「今ホームラン打ったって遅いよ。」

エリ：「そんなこと言わずにさ！健三ー、ホームランだぞー！」とエリが礼の真似をする。

礼：「からかわないでよ！」

エリ：「真似してるってわかった？」

礼：「全然似てないシ。」

(『プロポーズ大作戦』第4話)

(42) 礼：「大学の時、エリが結婚したら私にブーケくれるって約束してくれたもんね。」

エリ：「そんなこと言ったっけ？」

礼：「言ったじゃん！だから私、エリにブーケ貰ってから結婚するんだって、漠然と思ってたシ。」

エリ：「だったらちゃんと順番守ってよね。」

(『プロポーズ大作戦』第1話)

③ 断定型+Ø (独り言)

(43) 礼：「(前略) 準備しちゃおう！」

健：「うん。」

礼：「もうすぐみんな帰ってくると思うシ。」

(『プロポーズ大作戦』第5話)

「礼」は「準備しちゃおう」という指示を出したあと、「健」はすぐに承諾して行動し始めることから、それ以上「健」に働きかける理由はない。しかし、「礼」はその後、「もうすぐみんな帰ってくると思うし」と言い、準備の必要性を重ねて強調している。これは「健」に自分の指示をより納得させるためではなく、むしろ独り言のように話の合理性をもう一度に確認する用法である。このパターンは「断定型+Ø」の「行為の叙述」(42)とまた異なり、前者は独話的かつ行為の合理性を自ら再確認をするという働きかけ性のない用法であるが、後者は対話的かつ過去に行った客観事態を客観的に述べ、「当然なことだろう」という反発の態度が含まれる用法である。

以上、発話行為の観点からシの接続用法及び文末用法を考察してきた。シの前に来る発話内行為型は「断定型」のみであるが、主節にあたる内容は「断定型」ほかに、文脈から復元できない「Ø」の例も見られた。「断定型+(断定型)」のシは、話し手が自分か他人の判断・態度・行為を聞き手に受け入れさせるために、聞き手の共感を呼び出しやすい、説得性のある証拠で裏付ける用法である。それに対し、「断定型+Ø (独り言)」のシは、独話的な性質を帯び、シによって指示を出した理由、感情を表出する合理性を自分の中に再確認するために使われている。「断定型+(断定型)」、「断定型+Ø (独り言)」はいずれも話し手自分、あるいは他人を納得させる場合に使用されるが、「断定型+Ø」には相手に対する反発な態度を表す際によく用いられる。

文末用法の「断定型+(断定型)」は、接続用法の「断定型+断定型」を継承し、会話相手に納得させるための最も説得性のある根拠を提示するという使い方は、文中のシにも文末のシにもあり得る。一方、接続用法と比較して、シの文末用法のほうが豊富であり、「断定型+Ø」、「断定型+Ø (独り言)」と2つパターンが新たに確認できた。

IV. まとめ

以上、本研究は発話行為理論という枠組みで、接続助詞カラ・ケド・シの接続用法と文末用法を考察した。結果を次の表2にまとめられる。

表2. 発話行為理論から見る接続助詞カラ・ケド・シの接続用法と文末用法

	接続用法	文末用法
カラ	断定型+断定型 断定型+行為指示型 —	断定型+(断定型) 断定型+(行為指示型) 断定型+Ø
ケド	断定型+断定型 断定型+質問型 断定型+行為指示型 —	断定型+(断定型) — — 断定型+Ø
シ	断定型+断定型 —	断定型+(断定型) 断定型+Ø 断定型+Ø(独り言)

白川(2009)で主張されたように、接続助詞の接続用法と文末用法に平行性が存在していることが確認できた。特に、「断定型+(断定型)」の文末用法は、「断定型+断定型」と強く連続しており、接続助詞としての性質が多く残っている。一方、接続用法と文末用法に異質性が存在していることもわかった。文末用法でしか見られない「断定型+Ø」というパターンが現れたほかに、ケドの「断定型+質問型」「断定型+行為指示型」のような、接続用法のパターンは文末の場合で使いにくいケースもある。

カラ・ケド・シは従来、主節と従属節の間に使用される表現と見られ、論理関係を表わすとされてきたが、本研究の考察を通して、いずれも文末に用いられる場合に新たに何らかの意図や感情を伝える用法を獲得したことが明らかになった。具体的には、文中、文末のカラとも「原因・理由・根拠」を表わすことができるが、「断定型+Ø」のカラは話し手の反論や不満を表わすという、否定的な強い個人主張を相手に押し付ける特徴がある。ケドは文中、文末を問わず関連情報を追加する用法を持っているが、文末のケドは相手の考え方、もしくは行為上の改善を求めるという働きかけの意図がうかがえる。シは話し手の主張を聞き手に納得させるための説得性のある根拠を示すところで接続用法と文末用法が連続しているが、文末のシには発話し手の不満が含意され、反論または否定的な態度を表明する傾向が確認できた。

参考文献

- 今尾ゆき子 1994 「「ケレド」と「ノニ」の談話機能」『世界の日本語教育 日本語教育論集』4巻, 147-163頁。
- 木山三佳 2004 「学習者言語にみる接続助詞「から」の談話機能の発達」『世界の日本語教育』14巻, 93-108頁。
- 楠木徹也 2015 「中途終了型発話文「～けど」「～ので」の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学 留学生日本語教育センター論集』41巻, 47-60頁。
- 国立国語研究所 1951 『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版。
- 白川博之 2009 『言いさし文の研究』くろしお出版。
- ジェフリー・N・リーチ 1987 『語用論』池上嘉彦・河上誓作（訳），紀伊國書店。
- 曹英南 2000 「「けど」で言い終わる発話の語用論的研究：「言い終わり」の「ケド」を中心に」『言語文化と日本語教育』19巻, 89-100頁。
- ジョン・L・オースティン 1978 『言語と行為』坂本百大（訳），大修館書店。
- ジョン・R・サール 2006 『表現と意味－言語行為論研究』山田友幸（訳），誠信書房。
- 高橋太郎 1993 「省略によってできた述語形式」『日本語学』12巻, 18-26頁。
- 成田麻衣子 2004 「現代語における文末表現の分析－「けど」で終わる文を中心に－」『昭和女子大学大学院 日本語教育研究紀要』2巻, 83-89頁。
- 朴仙花 2008 「現代日本語における接続助詞で言い終わる言いさし表現について－「けど」「から」を中心に－」『言語と文化』9巻, 253-270頁。
- 許夏玲 2004 「語用論の観点から見た文末表現の使用：「けど」を例にして」『東京学芸大学紀要 第二部門 人文科学』55巻, 59-65頁。
- 2010 『意味論と語用論の接点からみる話し言葉の研究』白帝社出版。
- 前田直子 2009 『日本語の複文－条件文と原因・理由文の記述的研究－』くろしお出版。
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店。
- Austin, J. L. 1975 *How to do things with words*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press. (ジェフリー・N・リーチ 1987 『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳, 紀伊國書店。)
- Leech, Geoffrey N. 1983 *Principles of pragmatics*. London, Longman. (ジョン・L・オースティン 1978 『言語と行為』坂本百大訳, 大修館書店。)
- Searle, John R. 1976 "A classification of illocutionary acts", *Language in society* 5 (01), pp.1-23.
- 1979 *Expression and meaning: Studies in the theories of speech acts*. Cambridge, Cambridge University Press. (ジョン・R・サール 2006 『表現と意味－言語行為論研究』山田友幸訳, 誠信書房。)

用例出典：

現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言 1.1.0 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
『プロポーズ大作戦』金子茂樹（2007）フジテレビ